Ⅲ　大安寺西中房

1　検出遺構

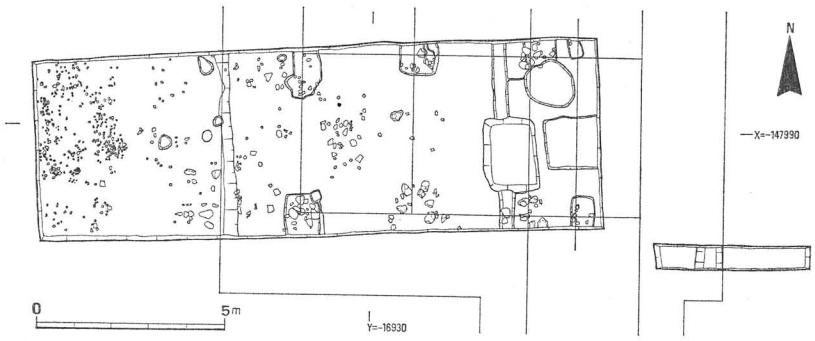
大安寺小学校校庭の南端に南北幅５ｍ、東西長15ｍの発掘区、およびこの発掘区の東南に近接して、南北幅０.５ｍ、東西長４ｍの東西トレンチを設定した。遺構面は、運動場整地土直下で、西中房の基壇と礎石据付け用の根石８ヶ所を検出した。基壇は南北方向で、西中房が南北棟であることが確認された。基壇西側には石敷があり、当時の生活面であったと考えられる。また、発掘区の一部と東西トレンチを１ｍ以上掘り下げて、大安寺創建以前の旧地表面を検出することができた。遺構面が非常に浅いこと、残存する基壇高が低いこと、根石しか検出できなかったことなどから、西中房基壇が後世にかなりの削平をうけていることが指摘できる。

(1)　西中房根石

発掘区東半で根石を８ヶ所検出した。根石は基壇上の同一面で検出したが、その位置と根石の個々の大小、根石の密集範囲の広狭によって大きく２群にわけることができる。

根石第Ⅰ群は、一辺約１ｍ四方の範囲に、径30㎝～10㎝の自然石が密集したもので、発掘区北端で東西に並ぶ３ヶ所と、南端で東西に並ぶ３ヶ所の合計６ヶ所がある。このうち北端の西側２ヶ所と南端の西側１ヶ所の合計３ヶ所では根石を配置するための掘形を検出したが、残る３ヶ所では掘形はなく、基壇土に直接埋まっていた。根石第Ⅰ群の柱間寸法は、梁行２間、10尺等間、桁行１間、14尺である。なお、梁行については『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』（以下、『資財帳』と略記する）に「広三丈」と記されていることから、さらに梁間10尺で１間分東へのびていたものと考えられる。根石第Ⅰ群については、掘形を有するものと、掘形のないものとの間に修復あるいは改築による前後関係があるかもしれない。

根石第Ⅱ群は、発掘区の東端で南北に並ぶ２ヶ所を検出した。いずれも根石を配置するための掘形があり、掘形の規模は各一辺０.５ｍ、０.７ｍである。根石は丸味の強いこぶし大の自然石である。桁行の柱間寸法は14尺で、根石第Ⅰ群の桁行寸法と等しいが、根石第Ⅰ群の柱筋とは１.２ｍ東へずれている。梁行については対応する根石を残していないためわからない。根石第Ⅰ群と根石第Ⅱ群とは、桁行寸法は同じであるが柱筋が一致せず、おそらく梁行寸法につい

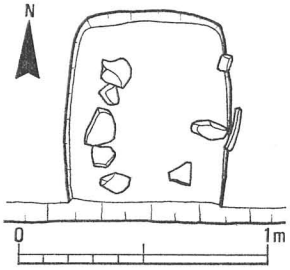


第10図　発　掘　遺　構　図

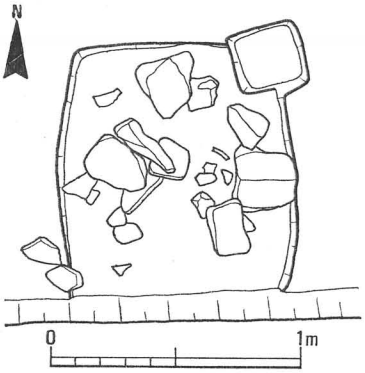
ても異なるものと思われる。また、その規模からは根石第Ⅰ群が古く、根石第Ⅱ群が新しいであろう。

(2) 西中房基壇

発掘区中央やや西寄りで、西中房基壇西端にあたる南北方向の落ち込みを検出した。基壇外方の西側は、現存する基壇の上面から約0.1m低い平坦面で、発掘区西端には瓦の小片を混えた小礫が密集しており、石敷の痕跡と考えられる。基壇外構は本来、凝灰岩切石によってなされていたのであろうが、基壇外構や雨落溝の痕跡は残存していなかった。このため、基壇の出については正確な寸法が不明である。しかし、今回検出した基壇西端と根石第Ⅰ群西柱列との距離が1.9mであり、ほぼ7尺(2.1m)であったと推測される。東西トレンチでは、相当深くまで後世の撹乱を受けていたが、中央やや西寄りで幅0.4m、深さ0.1mの浅い素掘りの南北溝を検出した。この溝は根石第Ⅰ群の推定東柱列から東1.6mの距離にあるので、基壇東地覆石抜取痕跡とも考えられる。



第11図 根石第Ⅱ群



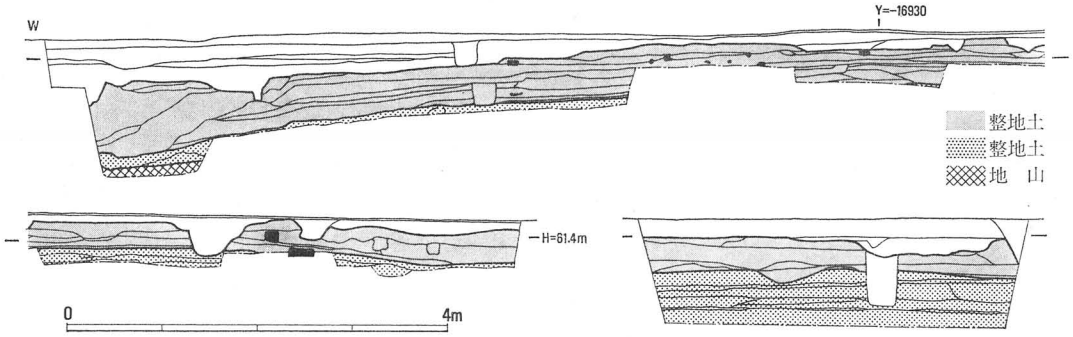
第12図 根石第Ⅰ群

(3) 旧地表面

土層の堆積状況を知るために、発掘区西南隅と東西トレンチを深く掘り下げた結果、この2ヶ所で大安寺創建以前の旧地表面を確認することができた。

発掘区西南隅では、現地表下1.4mで灰色粘土層となる。この灰色粘土層の上面から木材の削り屑と共に少量の土器と軒平瓦1点が出土した。旧地表の灰色粘土層の上には、赤褐色砂層、暗褐色バラス層、黄色粘土層等が堆積する。これらは大安寺造営時の盛土整地層である。

東西トレンチでは、現地表下1.1mで灰黒色粘土となり、この層の上面でも木材の削り屑が少量出土した。この灰黒色粘土層が発掘区西南隅検出の灰色粘土層とつらなり、旧地表面は東が高く西に低い緩傾斜であったとみることができる。なお、この地点では、厚さ約0.5mの盛土を行なって水平にならした後に凝灰岩粉末を敷きつめ、さらに盛土を行なっている。



第13図 南 壁 土 層 図

2　遺　　物

(1)　土　器　（第14図、図版７）

大安寺創建以前の旧地表面、中房基壇土、東西トレンチの南北溝から奈良時代前半期の土器が、寺地造成時の盛土中から少量の土師器、須恵器、円筒埴輪が出土した。

旧地表面出土土器　旧地表面で土師器皿、須恵器蓋が出土した。

土師器皿（38・39）は、平坦あるいはわずかに丸い底部と短い口縁部からなり、端部内側には沈線が１条めぐる。底部内面をなで、口縁部内外面を横なでし、底部外面は調整しない。38は口径11.0㎝、高さ 2.1 ㎝。39は口径10.8㎝、高さ 2.5 ㎝。

須恵器蓋（47）は頂部破片で、外面はヘラ削りののちになでて仕上げている。口径16.4㎝。

基壇盛土出土土器　基壇盛土中から須恵器蓋・鉢が出土した。

須恵器蓋（45）は平らな頂部と垂直な短い縁部からなり、宝珠つまみがつく。口径 5.7㎝。

須恵器鉢（48）は鉄鉢形の土器で、口縁端部はひらたく、端面は内傾する。口径20.0㎝。

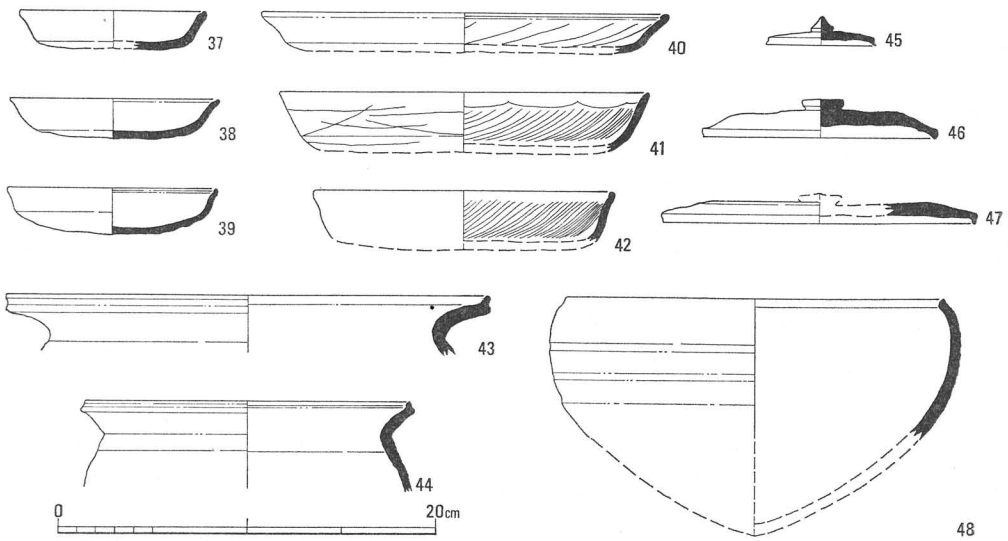
南北溝出土土器　南北溝から土師器杯・皿・甕、須恵器蓋が出土した。

土師器杯（42）は口縁部破片である。内面には一段の斜放射暗文がある。口径約16㎝。

土師器皿（40・41）には口縁端部を巻き込むもの（40）と、巻き込まずまっすぐおわるもの（41）とがある。いずれも底部外面をヘラで削り、41の口縁部外面には粗いヘラ磨きがある。40の内面には粗い１段の斜放射暗文、41の内面には１段の斜放射暗文と連弧暗文がつく。37の口縁部には煤が付着し、灯明皿に用いられている。口径 9.8 ㎝、高さ 2.0 ㎝。

土師器甕（43・44）はいずれも口縁部破片である。43は口径17.0㎝。44は口径25.4㎝。

須恵器蓋（46）は平坦な頂部とわずかに屈曲する縁部からなり、低い宝珠つまみがつく。内面は平滑で、硯として用いられている。口径12.2㎝、高さ 2.0 ㎝。



第14図　土器（37～44　土師器、45～48　須恵器）

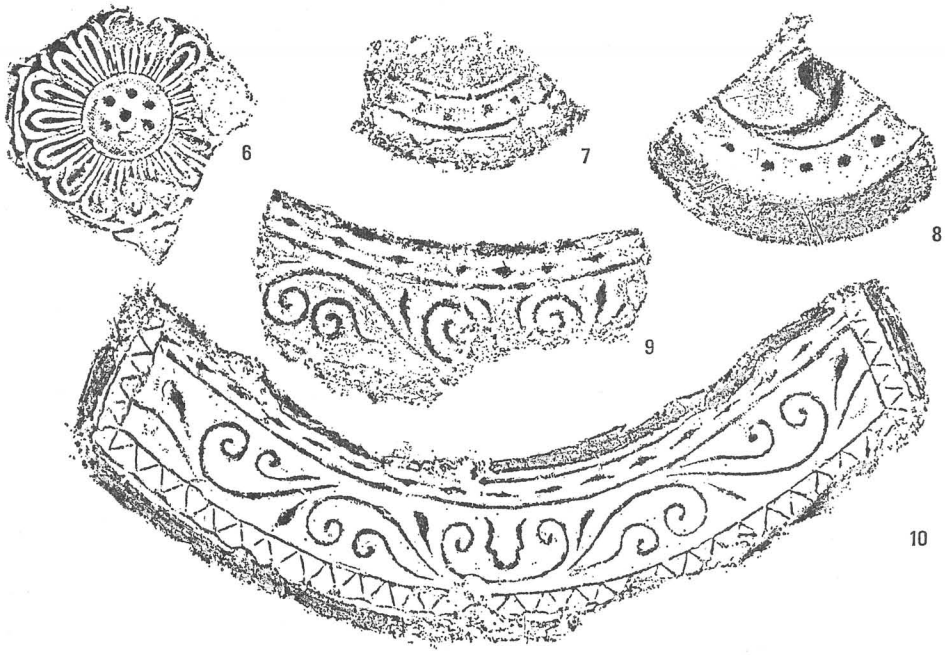
(2) 瓦 （第15図、図版８）

出土の瓦類は丸・平瓦若干と軒丸瓦３点、軒平瓦２点、熨斗瓦２点である。

６は内区に複弁８弁蓮華文をおく。中房はまるみをおびる。弁区はわずかにもりあがりを示す。間弁は長く伸び、界線のように蓮弁を区画する。外区を欠失しているが、同型式の平城宮所用瓦でみると外縁に線鋸歯文を、内縁に珠文をめぐらす。７は外区内縁に珠文６個を残す小片である。外縁に線鋸歯文をかすかに認めることができる。大きさ、珠文の間隔からみて、付表―軒丸瓦１に示す小型軒丸瓦である。８は内区に巴文をおき、外区に珠文をめぐらせている。巴文の頭部は大きく、尾部は内外区を画す圏線に接する。珠文帯と外縁の間には圏線はない。外縁は幅広い。近世のものである。

10は均整唐草文軒平瓦である。西中房基壇盛土の下、灰色粘土の旧地表上面から出土したもので完全品である。瓦当の最大幅34cm、長さ45.7cmある。段顎である。平瓦部凸面はほぼ全面篦削りし、平瓦先端部に縦位の縄叩き痕を残す。凹面は四周のみ篦削りし、布目圧痕をよく残している。また、3.5～4.0cm幅の粘土紐の痕跡をみることができ、平瓦部が桶巻作りによったことを示している。９は文様構成が10とよく似ているが、細部で異なっており、とくに唐草文各単位の巻込みが４より大きい。４・５ともに大官大寺から出土するものと同笵品である。

熨斗瓦（図版８―11）は、一辺12.3cm、厚さ1.9cmで板状を示す。１面に縄叩き痕を残し、他面は切断時の切り口とともに生乾きの段階で打ち割った割り口を残す。全く板状で、通常見られる平瓦半截の熨斗瓦とは形態を異にする。今迄この種の瓦は遺構の一部として見出されたことがなく、他の瓦類に共伴出土している。平瓦と似た厚さからみてここでは熨斗瓦と考えた。



第15図 軒　　瓦

3　大安寺伽藍配置図について

大安寺については、昭和29年以来、南大門、中門、講堂、鐘楼、西太房、西中房、北東中房、井屋、南大門脇の宿直屋、その他の発掘調査が行われてきた。これらの調査結果が『資財帳』に記された堂塔規模とほぼ一致することが確認された。そして、これらの調査結果や『資財帳』の記事から、諸先学によって大安寺伽藍配置の復原がなされてきた。

大安寺西僧房については、昭和38年に奈良県教育委員会が行った調査によって、太房の桁行と中房の桁行とが等しく、かつ太房の桁行が14尺であること、太房の梁行柱間が13尺等間、中房の梁行柱間が10尺等間であることが確認されている。また、ここで検出された柱穴のうち東南端の１ヶ所が、昭和49年に奈良国立文化財研究所によって再発掘されている。この昭和49年検出の太房柱位置は、今回検出した中房位置の北14尺の位置にあたる。また、昭和49年のこの調査では、鐘楼と、その繋廊も同時に検出されている。

一方、大安寺中門脇の廻廊は、西端で西太房につながると想定されており、昭和49年検出の太房東端の柱位置と、昭和29年の発掘で検出された中門西廻廊西端の柱位置とは、ほぼ真南北の方向にとおっている。

その他、奈良県教育委員会が行った76―２次調査では、北東中房の根石列が検出されており、主要伽藍外の苑院、花園院と想定される地区でもいくつか調査されている。

こうした発掘成果と、『資財帳』記載の堂塔規模を考えあわせて、今回大安寺伽藍復原図を新たに作成した。なお、ここでは食堂を北僧房の北側に想定したが、これは『資財帳』における堂塔の記載順序が、東南隅から北へ時計まわりに記されているとする村田説(註)にのっとっている。ただし、奈良県教育委員会が、76―３次調査として行なった東僧房東方の発掘調査で礎石根石列が検出されており、食堂の位置の決定は今後の調査に期待される。

（註）村田治郎「薬師寺と大安寺の占地」（『史迹と美術』二四〇、1954年）

第１表　資財帳にみえる堂塔規模

堂塔名	長	広	高	堂塔名	長	広	高
金堂	11丈８尺	６丈	１丈８尺	宿直屋金堂脇	１丈３尺	８尺３寸	
講堂	14丈６尺	９丈２尺	１丈７尺	南大門脇	２丈４尺	１丈	７尺５寸
食堂	14丈５尺	８丈６尺	１丈７尺	中門脇	１丈４尺	１丈	８尺
経楼	３丈８尺	２丈５尺		温室院一口	６丈３尺	２丈	
鐘楼	３丈８尺	２丈５尺		一口	５丈２尺	１丈３尺	
食堂前廡廊	55尺	１丈３尺	１丈５寸	一口	５丈	２丈	
経楼廡廊	２丈７尺	１丈４尺	８尺	禅院堂	７尺(丈)	４丈	１丈４尺
鐘楼廡廊	２丈７尺	１丈４尺	８尺	僧房一口	６丈３尺	３丈８尺	
講堂東西廡廊	９丈	１丈	１丈５寸	三口	５丈	２丈	
講堂北廊	５丈２尺	１丈８尺	１丈８尺	一口	10丈８尺	１丈８尺	
食堂廡廊	９丈９尺	１丈８尺	８丈５寸	一口	４丈	１丈５尺	
東西太房南列	27丈4尺5寸	２丈９尺	１丈５寸	廡廊一條	４丈	１丈２尺	
東西太房北列	24丈５尺	２丈９尺	１丈５寸	大衆院厨	22丈	５丈	１丈１尺
東西中房南列	27丈4尺5寸	３丈	１丈１尺	竈屋	11丈４尺	７丈２尺	１丈８尺
東西中房北列	29丈１尺	３丈	１丈１尺	維那房	７丈７尺	２丈８尺	１丈６尺
北太房	12丈５尺	３丈９尺	１丈５寸	井屋	７丈７尺	３丈	１丈４尺
北東中房	27丈	３丈	１丈１尺	碓屋	５丈	２丈	
小子房南列	10丈	１丈２尺	９尺	政所院一口	７丈	４丈	１丈４尺
東小子房	29丈１尺			一口	５丈	３丈	１丈１尺
井屋（並六角）	１丈		９尺	一口	９丈	５丈	１丈３尺
				倉二四口			

4　まとめ

大安寺は、聖徳太子建立の熊凝村の道場に始まり、舒明天皇の11年（639）には百済川の辺に九重塔をもつ大寺（百済大寺）になったという。しかしその直後に火災にあい、皇極元年(642)に造寺の詔がだされて、皇極天皇の時代に造営はほぼなったと考えられる。天武2年(673)、百済大寺は高市の地に遷され（高市大寺）、6年には寺名を大官大寺と改められた。なお大官大寺跡は藤原京左京十条四坊にあり、出土遺物も藤原宮の時代のものに限られることから、当寺跡は高市大寺までは遡らないともいわれる。和銅3年（710）、平城京への遷都とともに、諸大寺は新京に移された。大安寺の造営については諸説あり、そのうちで、『続日本紀』の「霊亀二年（716）五月辛卯、始徙建元興寺于左京六条四坊」の記事の「元興寺」は大安寺の誤りとする説が妥当である。また『扶桑略記』に大官大寺は藤原宮とともに和銅4年焼失したとあり、『資財帳』には大官大寺から大安寺に移した仏具経典等がみえることから、平城遷都直後から造営が始まっていたことが裏付けられよう。天平年間にいたり、渡唐僧道慈の差配により改造が行われ、天平末年には塔院を除いて、主要伽藍はほぼ完成した。なお東塔も天平神護2年（766）までには建立されて、それ以後、寺運は栄えた。平安時代中期にいたり、延喜、天暦期に講堂・僧房・西塔を災し、また寛仁元年（1017）には多くの諸堂も焼失し、再興もなされたが、次第に衰微したようである。

今回の調査は小規模であったが、大安寺西中房の根石列と基壇を検出するとともに、大安寺創建以前の地表面・整地層を確認し、僧房復原および造営事業に関する貴重な資料を得た。

西中房については、昭和38年に奈良県教育委員会が行った調査により、前後2期の建物があり、前期は梁行3間、各10尺等間、後期は梁行4間、各8尺等間であることが明らかにされている。今回の調査でも同様に2期にわかれ、前期建物は前回調査で分らなかった桁行柱間（14尺）と基壇東西幅（44尺）が明らかになった。この建物は桁行柱間を21間（294尺）にとると『資財帳』の西中房北列とほぼ一致し、前回検出分と合せてその位置は西中房北列の南端三間に当るものと推定した。後期建物は2ケ所に礎石据付跡をとどめていた。残存状況が悪く、平面形式を明らかにすることができなかった。この後期建物は寛仁元年（1017）火災後に再建された西室二間（『巡礼私記』）にあたるものであろう。

調査区西端部の一部掘下げによって、大安寺創建以前の地表面および盛土整地層を確認したことは大きな成果であった。旧地表面は現地表下1.4mの灰色粘土層で、この地区では1m以上にわたって盛土整地をおこない、さらに基壇部分に盛土をしたことがうかがえる。灰色粘土層上面には大官大寺式の軒平瓦・奈良時代前半期の土器・木材の削り屑が堆積しており、これらは大安寺造営に関連する遺物とみることができる。

大官大寺式瓦は南大門、中門地区、講堂地区、北東中房地区でも出土しており、その形式・技法・焼成状況からみて大官大寺所用の再使用瓦と思われる。大官大寺の調査では中門・回廊が未完成のまま焼失した状況で検出されているように、新京移転に際して建築途上の瓦を転用したものと考えられる。